



赤十字の父 アンリ・デュナン 第2回

講演師 一龍齋貞花

「人の命を尊重し、敵味方の区別なく救う」ことを目的とし、世界一九二〇の国と地域が活動している赤十字。

赤十字の提唱者アンリ・デュナンは、第一回ノーベル平和賞を受賞しています。

イタリア統一戦争の激戦地ソルフェリーノでの救護をおえてジュネーブに戻ったアンリは、ソルフェリーノで見聞きした惨状と救護活動の様子を多くの人に知ってもらおうと、本を書き始めます。

お母さんは、寝食忘れて机に向かうアンリを励まし続けました。

三年の歳月を費やし、「ソルフェリーノの思い出」を自費出版するや、ヨーロッパ全土に大きな反響を巻き起こした。その中に、

「クリミア戦争の真最中、毎晩ランプを手にし広いスクタリの病院を歩き廻って、怪我や病気で苦しんでいる兵士達をなぐさめ励ました、フロレーン・ス・ナイチンゲールの姿を見た人は、生涯忘れることはないであろう」と書き、世界中の人々が力を合せて敵味方の区別なく、戦争で傷ついた人や病気で苦しんでいる人を救おうではないかと、世界に向かって呼びかけました。

最初にアンリのところへ駆けつけたのが、ジュネーブ福祉協会の会長で法律家のグスタフ・モアニエ

「私は読み終わって思わず涙を流した。あなたの提案に賛成だ。是非実現させよう」

フランスの作家ビクトル・ユゴーや、イギリスの文豪チャールズ・ディ

ケンズからも、
「あなたの呼びかけに協力します」との手紙も寄せられました。

アンリの提案を実現させようと、アンリ・デュナン、モアニエ、モノアール医学博士、アッピア医学博士、デュール將軍によって、「五人委員会」が組織され第一歩を踏み出した。

「傷病兵の救護に関する国際組織や、その国際組織を保証する国際法を、まず制定しなければ駄目だ」

「モアニエさん、僕は世界中の人達の心を一つに結び合わせることが一番だと思っています」

「それは余りにも理想すぎるのではな
いか」

法律家のモアニエは、理想論では駄

目で、まず組織をきちんと作らなければ駄目だと意見をたたかわせる

「いつまで議論ばかりしていても仕方がない。アンリ君の言うとおりにしてみよう」

アッピア博士の言葉に、五人委員会はアンリをヨーロッパ各国に派遣することを決め、発会式に多くの国から多くの人が参加してくれなければ、目的を達成することは出来ない。

アンリは、「ソルフェリーノの思い出」を旅行鞆に詰め込み、二人の秘書を自費で雇い、汽車賃からホテル代まで総て負担、三千キロに及ぶ愛の巡礼が始まります。

パリでは、貴族や名士はじめ数多くの人々が、熱心にアンリの話に耳をかたむけてくれました。

「ソルフェリーノの思い出」を読んで

感激した、オランダの軍医バステイング博士から、

「ベルリンで開かれる会議に、各国の軍医が集まり戦争における負傷兵をいかに救護するかを話し合うことになっているから、出席するように」という手紙が届きました。

陸軍軍医会議に出席したアンリは、イタリアの戦場での経験を語り、戦争の時の負傷兵を救護する団体の必要であることを、熱心に訴えます。

バステイング博士は立ち上がると、「皆さん、今のアンリさんの提案に賛成の方はご起立ください」

「賛成、さんせい」と全員起立。「有難うございます。改めて各国の人たちの意見を聞く集会を開くことになっています。ご案内を差し上げますので是非ご出席下さい。どうか皆さんのお力で国際会議を成功させて下さい」

軍医達は、アンリの情熱に感動。こうして行く先々で大きな賛同を得て、中々帰国できないほどの大成功。

第一回国際会議

名称と旗の決定

一八六三年（文久三年）十月二十六日、アメリカでは奴隷解放された年。

ジュネーブの会場には十六カ国の代表が出席し、国際会議開催。議長団席には、モアニエ、アツピア、モノアール、デュフルが座り、アンリは書記でした。

「戦場で敵味方の区別なく、負傷兵や傷ついた市民を助ける国際組織の誕生、これこそ人類愛にもとづくものであり、そのために旗が必要だと思えます。その旗のあるところ総ての戦争は中止され、救護活動が始まるでしょう」

熱心な討議の末、「白地に赤の十字」この運動が始まったスイス国旗が、赤字に白の十字なのでそれを逆にしたもの。赤は血の色を意味しています。旗にちなんで名称も「赤十字」と決定。この時、新聞記者が書記をつとめるアンリに、

「アンリさん、あなたがこの赤十字を作るために努力されたんですよ。さればあなたは赤十字の創立者です。創立者としてのご感想を聞かせて下さい」

「イエ、私は創立者でもなんでもありません。赤十字の創立者は各国の心ある人々総てです。私はほんの少しお手伝いをしただけです。人間は一人一人

では弱いものですが、同じ目的を持つて集まると、素晴らしい力を発揮することが出来るんです」

アンリは、もう自分の使命は終わったと思っていました。

少年時代から夢に描き続けた貧しい人々、恵まれない人々、不幸な人々を救いたいという願いが、「赤十字」という形で実を結ぼうとしているのです。

赤十字の国際会議は、翌年の八月二十二日、再びジュネーブの公会堂で開催され、十六カ国の代表が集まり、

第一・各国に一つの赤十字中央委員会をつくり、戦争が発生したら直ちに軍隊の医療活動を助ける。

第二・各国の赤十字中央委員会は、常に衛生上必要な物資を確保し、看護に当る者を養成する。

第三・赤十字看護人は、どの国でも同じ徽章「白地に赤十字」をつける

第四・各国の委員会は、国際会議を開き、経験を報告しあうこと。

こうした規約が作られ、正式に赤十字条約が承認され、十二カ国が調印、ジュネーブ条約といわれ、国際赤十字組織誕生。モアニエが会議の実験を握りアンリは接待係でしかありません。実務が出来なければ、実務実行者の

手柄になってしまふことが往々にしてあります。名前だけでも創立者なり提唱者となれば報われますが、名前さえなくなってしまうことがあります。

転変のアンリ

第一回ジュネーブ会議から三年後、アンリは五人委員会から身を引くとパリに移り、アルジェリアの事業をやり直すために、ジュネーブに戻ったものの借金は増えるばかりで、アンリの元へ借金取りが押しかけ屋敷を取り巻くほどの有様。

「貴族で政治家だった名門なのに、落ちぶれたもんだ」

「本の売れた金はみんな赤十字に寄付したというじゃないか。借金も返さず寄付するなんて間違ってるよ」

「ありゃ借金泥棒、ろくでなしだ」アンリの活躍が目覚ましかっただけに、かえって非難の声は高まるばかり。屋敷も土地も失い、かくして流浪の旅が始まります。

アンリのその後の運命と、そして日本の赤十字設立は、次回連続に。